

令和5年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立久慈中学校 教諭 石井 貴子

- 1 派遣期日 令和5年 11月 10日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）宇都宮市立鬼怒中学校
所在地 〒321-0901 宇都宮市平出町 3764-10
<http://www.ueis.ed.jp/school/kinu-j/>
- 3 研修内容 研修会名：第47回関東甲信越地区中学校英語教育研究協議会栃木大会
研究主題：他者とつながり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成
～「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせる指導を通して～
派遣先研修内容：第3分科会「見方・考え方」を働かせた「読むこと」の言語活動の充実

4 感想

この度、関東甲信越地区中学校英語教育研究協議会栃木大会の4分科会（英語科で取り扱う4技能）の第3分科会に参加させていただいた。研究主題は「見方・考え方」を働かせた「読むこと」の言語活動の充実である。私の所属校の今年度の学校課題研究の主題を、「ICTの利活用を通じた、生徒の主体的な表現の育成」と設定し半年が過ぎようとしている。この度の派遣先の研究主題と所属校のテーマが相似していることから、「授業において、どのようにICT機器を利活用していくのか」に重点を置き、授業を拝見させていただいた感想を述べてみたい。

学校現場では、1人1端末タブレットが配付され久しいが、所属校では最近ようやく各教室に電子黒板が配置されたところである。夏季休業中に幾度かの職員全体での電子黒板や Teams、まなびポケット等の使い方研修を行ったところである。職員全員が、すべての教科において毎時間電子黒板を使用し授業をすることは、現在とても難しい状況にある。とにかく授業において怖がらずに使ってみる。これを念頭に置き学校課題研究を進めてきている。電子黒板を使っているとはいえ、デジタル教科書を映し出しているにすぎず、電子黒板の機能を駆使しながら授業を行う教師は少ない。

さて、今回拝見させていただいた授業において興味をもったところは、「School Takt(スクールタクト)」の活用である。スクールタクトとは、ブラウザ上において生徒が協働学習を行う事ができ、機種を問わずに

ICTを活用した授業ができる授業支援クラウドである。GIGA スクール構想や学習指導要領など最新の教育トレンドを考慮した様々な機能で、教員が教えやすく生徒が学びやすい環境を作ることができる教材アプリである。宇都宮市では、すべての学校に導入されているという。各自の考えを書き込んだシートが、リアルタイムで電子黒板に映し出され、なかなか自分の意見や

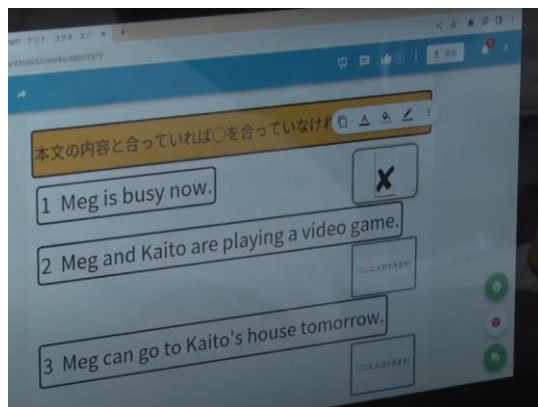
6本時の指導

(1) 目標 メグと海斗との電話でのやり取りを聞いたり読んだりして、自分の考えを表現することで、会話の要点を捉えることができる。(思考・判断・表現)

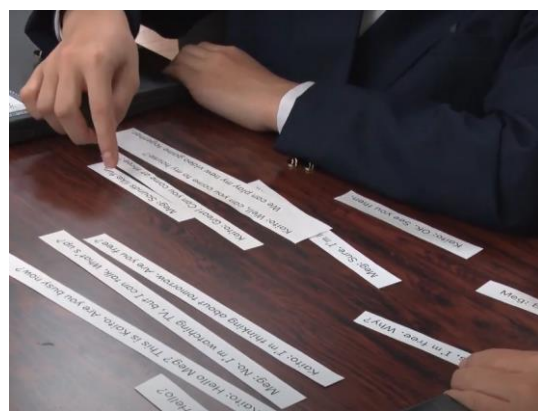
(2) 展開

学習活動	形態(分)	教師の支援・指導上の留意点 評価基準・評価の観点(評価の方法)	資料・準備
1 挨拶、QA、単語学習を行う。	5分		・ワークシート
2 本時の目標の確認をする。	2分		
3 本文内容理解を行う。	20分	・本文のイラストを見せ、海斗とメグが話している内容を想像させてから本文を聞かせる。 T: What's this in Kaito's hand? S: It's a cell phone. T: What is Meg doing? S: She is watching TV. T: Why did Kaito call Meg? S: He wants to know her schedule.	・スライド ・デジタル教科書 ・二人一台端末
4 会話の再現のためのルーブリックを作成する。	5分	・会話の中で必要な内容について考えさせ、さらに会話の理解を深めさせる。	・教科書
5 教科書の再現を行う	12分	・ルーブリックに沿って会話の再現を行うことで、必要な内容が伝えられるようにする。 ・文法的な正確性や教科書と同じであることを重視させる。	・二人一台端末
6 グループの中でペアによる発表を行う。	5分	・違うペアの発表を聞かせることで、自分たちの良さや他のペアの良さに気づかせる。	・一人一台端末
7 本時の学習を振り返る。	3分	評価基準・評価の観点(評価の方法) 【思考・判断・表現】電話でのやり取りを聞いたり読んだりして、自分の考えを表現することで、会話の要点を捉えることができる。 ・本時の学習を振り返り、教科書の本文から何をすることができたか、理解したことを伝えあうことができたかを記録する。	・一人一台端末

考えが自身の言葉で表現できない児童生徒にとって、周りの意見や考えがすぐに見られることで、「ああ、こういったことを書けばよいのか。」と確認することができ、その後すぐに書きこむことができていた。そうすることで、生徒の的外れな答えや考え等が減り円滑に授業が進むと感じた。スクールタクトは、一人一人の生徒把握に役立ち、かつ教師と生徒、生徒と生徒の双方向性あるコミュニケーションを実現できるツールと感じた。また、「振り返り」の場面においては、こちらもスクールタクトの機能を用い、振り返りシートに記入している。毎回の授業の感想等が蓄積され、のちに何度も見直すことができるので、自分自身で学習を振り返ることができ、とても効果的であると感じた。



また、本文内容把握理解の場面においては、本文全文を一文ずつ切り取ったものを、本文内容の通りに並べ替える作業をペアで行った。ペアで話し合いながらタスクを行うことで、互いの考えを述べ合いながら作業することができ、生徒それぞれが各々の答えに自信をもち発表していた。学級の席順においても、のちの分科会の中で、「どのようにして席順やペアを決めているのか。」と質問があった。好きな人とペアになっていることで、「楽しくより積極的に授業に参加するようになった。答えに自信がもてるようになった。」との回答だった。また、今回の授業では、「読むこと」の内容だったためか、タブレット上やノート・ペーパー等に英語（文や語彙）を書くという活動は取り入れていなかった。具体的な場面や状況・文脈に応じた英語表現を書かせることで、「思考力や判断力、表現力」が育つと考える。学習した表現を使って短い文を「書く」という作業も、「読むこと」の学習の中においても取り入れていくことが基礎・基本の定着につながるのではないかと考える。ICTを活用して「書く」活動をどのように展開しているのか、単元計画においては次時がその活動となっているので、ぜひ拝見してみたい。こうして授業全体を通してみると、全ての場面においてICT機器を使っているわけではないということに気づく。話し合いをしながら答えを導き出していく過程では、ICT機器よりも紙媒体で作業をした方が効果的で、ペーパーで活動する場面とICT機器との場面をうまく使い分けていくことが大事であると考えた。



所属校において、相互授業参観を行い互いの授業を見合う中で、ICT機器を積極的に使って授業を行う教師もいれば、機器操作が苦手であるために、なかなか活用することができずにいる教師もあり、さまざまである。今回の授業を参観させていただいて、すべての場面においてICT機器を活用していたわけではない。生徒の習熟度に応じた生徒一人一人の個別最適な学びを促進し、学びに向かう人間性や主体性を育てるためには、ICTの効果的な活用は必要不可欠になってくる。鬼怒中学校のように、所属校においても積極的に教師や生徒がICT機器を活用していく環境を構築し、今後さらに研究を進めていきたい。

